

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成21年度:91～92.

プレパレーション実践により手術後のケアをスムーズにすすめることができた発達遅滞の30代女性への関わり

日野岡蘭子

# プレパレーション実践により手術後のケアをスムーズにすすめることができた 発達遅滞の30代女性への関わり

看護部 皮膚・排泄ケア認定看護師 日野岡蘭子

## はじめに

プレパレーションの概念は小児看護から導入され、医療処置を子どもに説明するための遊びを取り入れることは、特に手術に臨む場面で行われることが多い。今回、発達遅滞のため手術を理解できず、手術という言葉により興奮を繰り返した30代女性に、入院前からの綿密な情報交換を基盤に、ストーマケアに対してのプレパレーションを効果的に実践した事例を経験したため報告する。

## 事例

事例は30代女性。体格は中肉中背。日常会話の理解度は7～8歳程度だが、拒否の際には泣き暴れコミュニケーションは不可能。幼少時より便秘のため職員が浣腸していたが、腹痛が強く暴れることが多く、排便管理に限界を感じていた。ヒルシュスプルング氏病を疑われる。

## 経過

発達遅滞のため、施設で生活しているケースでは、幼少時期に確定診断されないまま成長し、便秘との認識で排便コントロールに苦慮している場合がある。本事例の問題として、浣腸によってしか排便を得られず、腹部膨満のため苦痛を自覚しているが、浣腸の必要性を理解できないため拒否、暴れることを繰り返し、身体の成長に伴い、施設職員が排便コントロールに限界を感じ、時には職員の安全が保障されない事態も懸念されていた。

当院外来には施設職員、母親、患者の兄で来院。家族職員はストーマでの排便管理を希望し、医師と検討がなされた。WOC介入し、現在の排便管理方法とストーマ管理のメリット、デメリットについて検討した。デメリットは、本人がストーマをどう認識するのかが予測困難であること、理解を得られなかった場合にストーマケアが困難を生じる可能性があることを説明し、家族と相談のもと、本人にストーマについて説明を試みることとなった。しかし、手術という言葉に過剰に反応し説明は不可能と判断。ストーマ造設への家族の希望が強かったため、入院後に計画的に本人への関わりを行うこととし、入退院センターから事前に病棟に情報提供を行い、入院前から、入院時期、説明の方法、関わりを統一、手術室

看護師との調整を行い、万全の態勢を整えた。関わる職種すべてに手術という言葉は使用しないよう統一し、事前の処置は遊びと結びつけ施行した。

術後は本人が現在の状況を理解することができず混乱を来す可能性が極めて高く、安全面を最優先に考慮し沈静、呼吸管理で経過した。

装具交換は術後1週間程度と想定し、術直後の装具は長期連用の装具を貼付し、覚醒後も不定期な交換がないよう留意した。術後7日目に初回交換を施設職員と日程調整を行い実施した。本人がストーマを見た時の反応が予測困難であったため、混乱をきたさないようキワニストールを準備した。

キワニストールは、現在小児科であらゆる場面にプレパレーション用として広く使用されている。今回はストーマケアに特化したものとして準備した。最初に腹部にストーマを作り、両手で隠すポーズをとり、本人のストーマを見るのと同時に人形のストーマを見るよう計画した。洋服は、本人の好む色を聞きスタッフで作成した。人形には本人の好む名前をつけ、一体化を実感できるように考慮した。

ストーマはマジックテープで取り外しできるようにした。触っても良いけどとても大事なものであるとの認識を持ってもらうようスタッフが態度を統一して関わった。同時に、ストーマがあるから今までのような腹痛がないことを本人に認識してもらい、ストーマを重要なものとして捉えるための手助けとする。本人の装具交換に合わせて、人形のストーマ装具交換も同時に行った。

ストーマ管理方法として以下のことに留意した。本人は、苦痛がなければ処置などに協力を得られるが、飽きてしまうと我慢することは困難。そのためできるだけシンプルな管理方法で短時間でケアが可能であることを条件に装具を選択した。また、ストーマを受け入れていても、根本的な理解はしていないため、ストーマを無視する行動をとる危険性がある。ある程度の粘着性を持ち、多少の乱暴な取り扱いでも確実な粘着が得られるもの。排便処理は、現在施設職員が行うことを前提としているが、今後徐々にセルフケアを指導することも考慮するため、取り扱いが便利なマジックテープのタイプとすること。さらに長期間の腸管拡張のためストーマサイズが大

きく、使用できる装具に制限があった。最終的にノバ1マキシフォルドアップを選択した。

## 考察

幼少時に適切な治療がなされないまま発達遅滞で成長し、排便コントロールに苦慮している事例のストーマ造設術を術前から退院まで関わった事例について考察する。今回のストーマ造設において、最優先の理由となったのが排便に関するQOLの向上である。本人に判断能力がない場合は、小児同様家族の判断に委ねられるが、家族と養育者である施設職員の強い希望によりストーマ造設が決定し、結果としてQOL向上をもたらした。手術に拒否を示し理解を得られない本事例の周術期ケアでの最優先事項は、ストーマを無理なく受け入れることと、本人の理解力に合わせて苦痛から解放されることとストーマを結びつけることであった。関わりの中で効果的であったことが、入退院センターを通した事前の情報提供により関わる各者が情報の共有ができたこと。もう一つがプレパレーションの導入であった。プレパレーションには3つの意義があることが知られており情報を正しく与える、情緒的表出を後押しする、病院スタッフと信頼関係をつくることである。今回は術前の説明は困難と判断し、術後に限ってプレパレーションを施行した。ストーマケアは疼痛を伴うものではなく、本来のプレパレーションの目的にあるような痛みを乗り越えたことを自己認識するよりも、理解しやすい方法でのコミュニケーションにより不安や緊張を取り除き、本人が、ス

トーマの方が苦痛がないことに気がついたことで、スムーズにケアがすすんだ一因であると考え。ケアは可能な限りケアパーソンである施設職員とともに施行した。病棟内ではストーマケアの日程を計画し、業務の中で時間を確保するための調整を業務リーダーを中心に行い、日勤のスタッフが互いに協力した。施設職員とは、ケア手技の習得を前提にプレパレーションを導入した目的を説明し、患者がストーマを理解して受け入れるのではなく、苦痛がないことと結びつけて受け入れ、遊びの楽しい雰囲気の中で拒否なくケアを行えることを退院までの目標を共有したことで、職員、本人とも不安なく退院から施設への生活に戻ることが可能であったと考える。

## まとめ

1. プレパレーションの実践によりストーマケアがスムーズに進んだ発達遅滞の30代女性への関わりについて報告した
2. 入院前から入退院センターと病棟間で情報を共有し、周術期に計画的な関わりが可能であった
3. 本人参加による遊びの要素を取り入れたストーマケアは、ケアを進めていく上で効果的であった
4. スタッフ間で重要であったことは、落ち着いてケアができる時間と人的資源も含む空間の確保と、スタッフ、施設職員がケアのゴールを共有できたことであった